

明治期グリム童話翻訳集成 全5巻

川戸道昭・榊原貴教 編

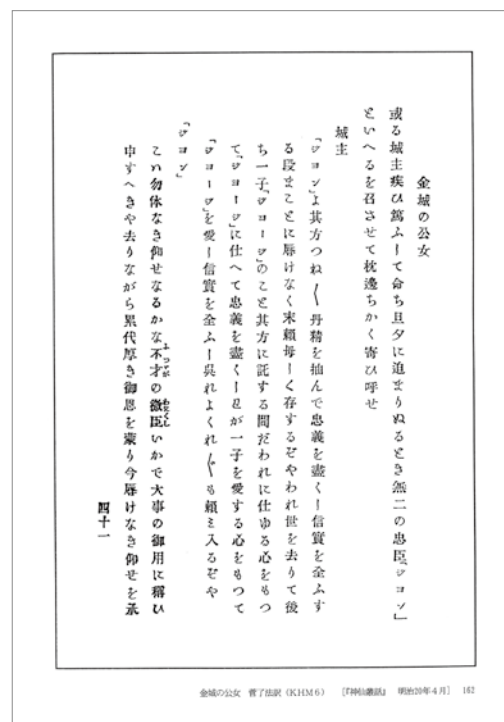
B5判・上製・総1,550頁・各巻口絵1頁 揃4-901061-05-4 定価(本体80,000円+税)

[企画: ナダ出版センター、発行: アイアールディー企画1999.9刊]

- 明治期グリム童話の翻訳を、初期に翻訳されたもの、雑誌に掲載のものを中心に復刻(明治期に訳された約300点から167点を集録)。
全翻訳作品の「KHM 分類別翻訳一覧表」「翻訳文学年表」を付す。

●明治期のグリム童話翻訳の経緯をたどると、おおよそ三つの流れがある。一つは、最初の翻訳者である菅了法訳『西洋古事 神仙叢話』や渋江保訳『西洋妖怪奇談』のように、西欧世界を理解する系譜として現れた。もう一つの流れは、『女学雑誌』に紹介されていたものを読むとわかるが、西欧の上流社会を模倣した母親の子どもに対するしつけの物語としてグリムが受容される。この系譜はその後、婦人雑誌に継承されていった。三つ目の流れは、子どもに直接語りかける物語として「小国民」「幼年雑誌」「少年世界」などに意識・翻案され紹介された。このうち、西欧世界理解の系譜は歴史的役割を終えて影を薄くし、子どもに直接語りかける童話は、巖谷小波のお伽噺や小川未明の童話文学の登場により創作童話へと脱皮していった。そして、二十世紀の日本児童文学の母体となった。しつけの物語としてのグリム童話が、教育制度の確立により、学校教育の中で普及し定着していくことになる。

それから一世紀経つ。教育という啓蒙活動そのものが問われ始め、グリム兄弟によって完成された模範的な民話、すなわち日本人にとってはしつけの物語として定着してきたグリム童話に対する認識に揺れが生じた。グリム童話の初原を求めて、ヨーロッパ近代から中世への民俗的な心の旅がここから始まった。この旅の目的は、グリム童話改訂への関心という形で現れたが、実際はグリムを受容する日本人の意識がどのように変容してきたかという日本人自身の問題に行き着くように思われる。それは変化の究明というより、アイデンティティの模索といえよう。いま私たちはグリムを通して、一世紀余の西洋受容と日本児童文学構築のありようを再検討する最良の時代に遭遇したのかもしれない。(はじめに抄)



金城の公女 菅了法訳 (KHM6) 『神仙叢話』 明治29年4月 182

【参考】グリム童話4話の明治期に翻訳された作品リスト。☆は『翻訳集成』に収録されて、掲載の形で読むことができる。

- 「狼と七匹の子やう」(KHM5)
 ☆明20・9 ハツ山羊(呉文聡訳『西洋昔噺』)
 明22・9 狼と七匹の羊(西翁訳『小国民』)
 明22・10 おほかみ(上田万年訳『家庭叢話』)
 ☆明28・8 子猫の仇(巖谷小波訳『少年世界』)
 ☆明37・3 伶俐な山羊(教育資料研究会訳『話の泉』)
 ☆明37・10 羊の天下(巖谷小波訳『少年世界』)
 ☆明41・10 狼と七匹の子山羊(木村小舟訳『教育お伽噺』)
 明42・12 狼の計略(百島冷泉訳『グリムお伽噺』)
 明43・9 狼と七匹の山羊仔(近藤敏三郎訳『グリムお伽噺』)
 明44・2 狼と七匹の犢牛(日野藤村編『ドイツお伽噺』)
 ☆明20・4 「灰かぶり(シンデレラ)」(KHM21)
 ☆明20・4 シンデレラの奇縁(菅了法訳『神仙叢話』)
 ☆明24・8 シンドレラ嬢奇談(即ち泰西皿々奇談)(渋江保訳『西洋妖怪奇談』)
 ☆明32・8 踊靴(白雨楼主人訳『少年世界』)
 明42・3 真珠姫(和田垣謙三・星野久成訳『家庭お伽噺』)
 「ブレーメンの音楽隊」(KHM27)
 ☆明26・1 街道音楽(西翁訳『小国民』)
 ☆明35・1 ブレーメンの音楽隊(ともゑ訳『少年世界』)
 ☆明36・3 ブレーメンの音楽隊(三槐生訳『心の花』)
 ☆明38・11 ブレーメンの町音楽隊(山君訳『心の花』)
 ☆明41・10 市街音楽隊(木村小舟訳『教育お伽噺』)
 明42・3 芸は身を助く(和田垣謙三・星野久成訳『家庭お伽噺』)
 明42・12 獣類の音楽家(百島冷泉訳『グリムお伽噺』)
 明43・9 旅法師(近藤敏三郎訳『グリムお伽噺』)
 「白雪姫」(KHM53)
 ☆明29・4 白雪姫(巖谷小波訳『少年世界』)
 ☆明37・3 白雪姫(教育資料研究会訳『話の泉』)
 明39・3 白雪姫(橋本青雨訳『独逸童話集』)
 ☆明39・5 白雪姫(山君訳『心の花』)
 ☆明41・10 白雪姫物語(木村小舟訳『教育お伽噺』)
 明41・12 白雪姫(寺谷大波訳『世界お伽噺第9』)
 明41・12 白雪姫(水野繁太郎・権田保之助訳『独逸文学叢書』)
 ☆明44・2 白雪姫(くすを生訳『新女界』)